「OPAC/TSS利用者アンケート」集計結果について

各研究室から接続して図書・雑誌の検索ができるシステム、OPAC/TSSは提供開始から4年を経過しました。この度、利用者の利用状況の把握と、検索環境の改善に役立てるため、8月10日発送で標記のアンケートを実施し、9月12日締切で179通の回答を得ました。以下、その結果の概要をご紹介します。

利用者の所属では、工学部が78名(46%)と半数近くを占め、次いで農学部18名(10%)、理学部16名(9%)、総合人間学部10名(6%)など規模の大きい学部が並びます。他方医薬系、および人文・社会系の各部局の接続は、学部等の人数と比較しても少ないことが確認されました。身分については、教官名での接続との回答が125名(70%)と圧倒的に多く、院生は31名(17%)と意外に少ないこともわかりました。

検索に使用する端末機種はNEC・PC-98シリーズと答えた人が107名と55%を占めますが、次いでSunなどのUNIXワークステーションでの接続が39名(20%)と、Macintoshの30名(15%)を上回っていることが注目されます。なお、最近の接続申請者はその大半が「ワークステーションからの接続」を希望しており、研究室の情報環境をうかがい知ることができます。

「検索結果に満足していますか」の問いについては、108名もの人が何らかの不満を表明しています。その理由や、要望として上げられている意見は以下のように大別されます。

a.　接続・検索の難しさ
b.　検索機能の充実
c.　ワークステーションからの接続で日本語入力ができない
d.　マニュアルの説明不足
e.　遡及入力年代の進展によるデータの充実
f.　学部生・学外を含む、OPACの一般開放

このうちa, bについては順次、システムの改良を行なっています。なお接続できなかった場合や、検索時のエラーなどのトラブルについては、本館システム管理掛で、個別に電子メールや電話で対応しています。一度つないで検索に失敗しても、諦めずにご一報ください。その他の疑問点についても、参考調査掛のカウンターでお受けしています。

c.について、「誘導型」検索においてはワークステーションでも日本語入力が可能となっております。接続後の「サービスメニュー」から選択し、ぜひ一度お試しください。画面の指示に従って進行する、初めてでも容易に検索できるシステムになっています。

要望の多いd.に関しては、新しい利用マニュアル(第2版)がまもなく完成します。Internetからの接続方法や、従来の「コマンド型」検索方式に加えて、「誘導型」での検索方法についても紹介し、皆様の質問にお応えする内容とします。発行のお知らせは、附属図書館各カウンターで配布のニュースレター「LSN」等でいたしますので、希望者はご注目ください。

同様に要求の高いe.については、担当掛では入力作業を進めていますが、京大全体の冊数が膨大であるため、急速な進展は難しいものになっています。将来的には京大全体の図書館（室）の協力が必要となりますが、当面はカードとOPACの両方の検索をお願いすることになります。

f.のご希望については実施の方向で検討しています。具体的な方法については、別途お知らせいたします。

また、今回のアンケートでは、他の内外のデータベースについての利用状況、接続希望等についても同時に設問しましたが、31名の方が大型計算機センター提供のINSPECも併せてお使いであることがわかりました。また、他大学の大型計算機センター等への接続も行なっている方も多く、学術情報センターNACSIS-IRの各種ファイル（全国総合目録、SCI他）は46名が利用されています。また何らかの形でInternetを利用しているという方も33名ありました。全体として、ネットワークやデータベースへの関心の高さをうかがわせる結果といえます。皆様よりお寄せいただいた回答は、今後の図書館の情報提供活動にも反映させていきます。ご協力頂いた皆様に御礼申し上げます。

（追記）『平成6年度京都大学附属図書館利用者のためのNACSIS-IR講習会』開催のお知らせ

今回のアンケートでも希望の多かった上記講習会を、下記のように計画しています。

記

日時：平成7年3月17日(金)午前と午後の2回開催(各2時間半)
会場：本館4階・地域共同利用室

定員：1回各10名　計20名
受講申し込み・お問い合わせは：情報サービス課参考調査掛(2636)

(参考調査掛)

第7回国立大学図書館協議会シンポジウム（西地区）に参加して

農学部学術情報掛　　長　坂　みどり

平成6年10月10日から11日にかけて岡山大学で行われた「ネットワークと図書館情報」をメインテーマとしたシンポジウムに参加した。

情報環境が大きく変化し、ネットワークの発展やコンピュータ技術の革命的な進歩は、図書館に「情報源」へのアクセスの距離の壁を取り除き「バーチャル・ライブラリー（仮想図書館）」の実現を我々に実感させるに至り、図書館システムもワークステーションが汎用機に取って代わろうとしている。

このような状況の中にあって、各大学ともコンピュータ技術の進歩に伴うシステム管理要員の養成・育成に頭を悩ましている様子が事例報告や質問の中に現れていた。京都大学では、システム管理掛が専任で置かれ、かつ大型計算機センターとの人的連携が図られ、職員の層も比較的厚く、人材が確保しやすいが、多くの大学では、システム専任の職員を置ける大学は希である。その中で、高知大学附属図書館では、学術情報係が受入業務とシステム管理を併任しており、情報センターで3カ月間みっちり研修を受け、システム更新にあたったという話しは、今後の図書館と他機関の関わり方の一つの指針となると思う。図書館と大型計算機センター等が密接な連携を取り、情報サービスの発展・開発の方途を図ることが有効ではないか。

基調報告で図書館情報大学の永田治樹助教授が、「業務ベースからサービスベースへの志向」を提案された。ここらで、大学図書館は、現状の認識と共にこれからの大学図書館のあり方をじっくり考えるべきではないかという訴えかけであった。情報環境の変化・発展を受けて大学図書館は、「どのような方向へ行くのか」、「どのようなサービスを利用者に提供していくのか」と言った新しい図書館サービスの開発に努力しなければならない。「情報源へのアクセスの保証」、「情報入手の可能性の増大」を図ること、また、図書館が単なる情報流通点ではなく、データベースを作成し、情報の媒介者となること、さらに図書館資料と利用者をつなぐ司書機能（ナビゲーションやレファレンス）を果たすことなどいろいろな課題が述べられた。

これらの図書館サービスの高度化・必要性は、程度の差こそあれ、カウンターに立つ図書館員は、現実の利用者の要求の高まりとして日々身を持って感じていることだと思う。

ところで現在、利用者にとってはOPACや全国総合目録サービス（NACSIS-IR）により全国の大学図書館の目録検索が可能となり、ILLシステムにより必要な文献が迅速に入手できるようになったが、図書館側から言えば、自館所蔵の資料だけでなく全国の大学図書館所蔵の資料がサービス対象となり、自館の直接の利用者だけでなくネットワーク上の全国の大学所属の利用者をサービス対象に置かねばならなくなった。

しかし現実に京都大学では、部局においてはコンピュータ機器の不足によりOPAC用どころか業務用端末も不足している現状であり、目録入力しても利用者はその目録が機械検索できないといった矛盾が生じている。OPACの利用ができなければ、目録入力どころか遡及入力も現実味を帯びてこない。一方では情報環境の進歩への対応に苦慮し、一方では旧態依然とした状況に甘んじるといった二極化が生じている。

次期図書館システムの構築にあたっては、全学レベルの図書館サービスを全学レベルで考えるべきであろう。OPAC検索、学内LANによるCD-ROMの検索しかりである。ネットワーク時代といわれる現在、学外へのオープン化も学術情報センターとの関係で今後課題は残る。九州大学が次期システムへの取組でワーキンググループを作り、アンケート調査、システム報告書の作成等を行ったという報告は参考になろう。

現在京都大学では、京都大学附属図書館将来構想検討委員会が設置され、7つの部会で現状の分析と、将来構想の実現に向け検討がなされているが、部局を越えた図書館サービスのあり方を考える時期に来ている。これからの図書館のあり方やサービスの方向を考えるのも図書館員全員の課題である。図書館員の有り様によって、図書館利用者の可能性を狭めるということはあってはならないと自戒を込めて思う次第である。